

平成26・27年度長崎県教育委員会・大村市教育委員会指定
小中連携による英語教育充実事業実践モデル校

お互いを理解しあう力を育てる 英語活動の学習指導

～「聞く・話す・読む・書く」指導を通して～



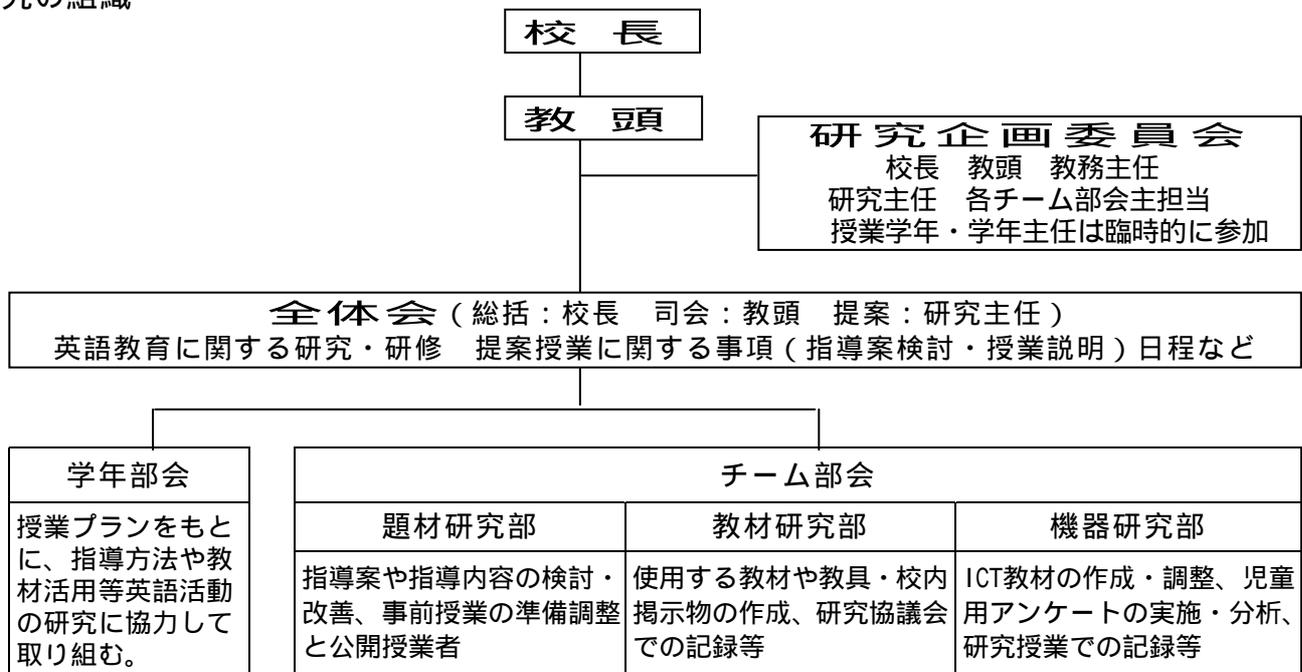
大村市立旭が丘小学校

1 全体構想

学校教育目標 「自ら正しく行う子」の育成 【合言葉】勇気 やる気 元気と感謝		
学校像	子ども像	教師像
安心と信頼があり児童と教師の心と心が通い合う学校	学習に対して真剣に取り組み、最後まで粘り強く学習する子ども	魅力ある授業づくりに向けて研修に努め学び続ける教師
【教育活動の重点】英語活動の授業研究を中心に、指導法の工夫を行う。 教員の授業力・指導力の向上を図る。 小学校での英語教育を先行し、カリキュラムや教材等の作成及び指導方法や内容に関する実践研究をする。		

研究主題	お互いを理解しあう力を育てる英語活動の学習指導 ～「聞く・話す・読む・書く」指導を通して～
研究仮説	相手を意識しながら、聞いたり話したり読んだり書いたりする指導に継続的に取り組めば、相互理解につながる態度を育てることができるであろう。
研究内容	英語活動のカリキュラムや授業づくりを柱として、教育機器を効果的に活用したり学習環境を整備したりして、児童が相互に理解しあえるような指導に関する研究を重ね、先行的な英語活動の授業に取り組む。
低学年テーマ	英語を使ってみんなで楽しめる活動の工夫について
中学年テーマ	対話を重視した英語活動の展開の工夫について
5年生テーマ	コミュニケーション活動を通して、いきいきと表現できる子どもの育成をめざす指導の工夫について
6年生テーマ	英語によるコミュニケーション活動を中心に、学級担任による書く活動を取り入れた指導の工夫について

2 研究の組織



3 2年間の研究の概要

研究方針

	26年度	27年度
研究主題	積極的にいろいろな人と関わろうとする児童の育成 ～英語を聞き取ったり話したりして、互いに伝えあう活動を通して～	お互いを理解しあう力を育てる英語活動の学習指導 ～聞く・話す・読む・書く指導を通して～
研究内容	外国語活動の指導目標を達成するために、全職員で研修・研究を重ね、外国語活動の指導内容を明確にし、教材分析や教育機器を工夫して活用したりして、外国語活動の授業に取り組み、仮説の検証を行う。 英語指導の授業スタイルや授業プランを考えたり、児童が自然と学べるような環境整備に取り組んだりして、早期英語教育の教育課程の基礎を創る。	英語活動のカリキュラムや授業づくりを柱として、教育機器を効果的に活用したり学習環境を整備したりして、児童が相互に理解しあえるような指導に関する研究を重ね、先行的な英語活動の授業に取り組む。
研究仮説	英語の学習を通して、身近な事柄についてコミュニケーションを図ったり、日本らしさについて理解を深めたりする学習を展開していけば、児童の表現力や自己肯定感を高めることができ、他者と主体的に関わろうとする児童の育成につながるであろう。	相手を意識しながら、聞いたり話したり読んだり書いたりする指導に継続的に取り組めば、相互理解につながる態度を育てることができるであろう。

研究経過

(1)26年度 研究の基本

- 観点1 . 研究目標・ゴールとする児童の姿の明確化
- 観点2 . 旭が丘の英語教育の系統的な指導内容・指導計画の作成
- 観点3 . 旭が丘の英語教育の授業スタイル（授業プラン）の確立
- 観点4 . 全職員で研修・研究を重ねること
- 観点5 . 児童が無理なく英語を学べるような環境整備



(2)26年度 研究の取組として

- 5年生・6年生の外国語活動の指導を中心に、授業研究や教材分析などに取り組み、仮説の検証を行うこと。
- 1年生～6年生の英語教育の教育課程の編成のために、各研究チームを中心に、小学校としての英語教育の目標や指導内容、指導方法や学習環境整備、系統性を踏まえたカリキュラムを創ること。



(3)26年度 研究の成果

- 英語教育の指導内容(計画)及び1単位時間の授業プラン作成
- 「旭学習指導要領」の作成
- Classroom English活用表の作成
- 校内表示及び掲示教材の作成
- 英語教育（低中高）の授業時数の確立



27年度の研究

(1) 研究主題の設定

26年度は「積極的にいろいろな人と関わろうとする児童の育成～英語を聞き取ったり話したりして、互いに伝えあう活動を通して～」と、児童の姿を意識した主題を設定し研究をスタートさせた。しかし、外国語活動に関する研究の積み重ねがないままに、先行的な研究に取り組み始めたので、我々教師が明確な児童像をイメージできずに共通理解を図ることができなかったことが課題となった。

そこで、27年度は、研究主題を「お互いを理解しあう力を育てる英語活動の学習指導～聞く・話す・読む・書く指導を通して～」とし、教師が「授業をする」という視点にたった研究に取り組んだ。

(2) 各部会のテーマの設定

昨年度の取組から、各学年の発達状況や英語に関する実態を考慮し、系統性のある授業づくりをめざし、学年テーマを設定して学習指導に取り組んだ。

低学年	英語を使ってみんなで楽しめる活動の工夫について
中学年	対話を重視した英語活動の展開の工夫について
5年生	コミュニケーション活動を通して、いきいきと表現できる子どもの育成をめざす指導の工夫について
6年生	英語によるコミュニケーション活動を中心に、学級担任による書く活動を取り入れた指導の工夫について

(3) 特例校としての(週あたり)年間授業時数

1年(1時間)	2年(1時間)	3年(1時間)	4年(1時間)	5年(2時間)	6年(2時間)
34時間	35時間	35時間	35時間	70時間	70時間
生活 英語活動 1時間 (生活68時間)	生活 英語活動 1時間 (生活70時間)	総合 英語活動 1時間 (総合35時間)	総合 英語活動 1時間 (総合35時間)	総合1・外国語1 英語活動2時間 (総合35時間)	総合1・外国語1 英語活動2時間 (総合35時間)

(4) 指導内容(研究の系統性)

旭が丘学習指導要領を基準に、各学年の目標(指導内容)が達成するような指導を行う。					
低学年	【聞く】	【話す】			
中学年	【聞く】	【話す】			【書く】
5年	【聞く】	【話す】	【読む】		【書く】
6年	【聞く】	【話す】	【読む】		【書く】

(5) 評価

評価の観点は、外国語活動の3観点とほぼ同じの「コミュニケーションのへ関心・意欲・態度」「英語への慣れ親しみ」「言語・文化に関する気付き」としている。

特に、「英語を聞かせて、英語の(単語・文)表現に慣れさせて、英語を話したり聞いたり読んだり書いたりして経験させる」ことを重点的に指導している。

評価は、授業時に児童の学習活動の様子を「行動観察」することと、Looking Backの「ふりかえりシート」による形成的評価と学期末でのポートフォリオ資料の活用により総合計画(通知表)に文章で表す総括的評価を行っている。

4 成果と課題

26・27年度の2カ年にわたり、県教育委員会指定「小中連携による英語教育充実事業」にかかる研究を進めてきた。

26年度は基礎研究として、児童の表現力育成のために主として外国語活動の授業実践や早期英語教育の環境の整備・教師の指導力向上のための研修に取り組んだ。

27年度は、昨年度の課題を踏まえ、研究主題を「お互いを理解しあう力を育てる英語活動の学習指導 ～聞く・話す・読む・書く指導を通して～」と設定し、目指すべき児童像を達成するために、我々教師の授業力の向上を図るという目的で研究に取り組んだ。

(1) 成果

【各学年のテーマの設定から】

各学年の実態を踏まえ、明確なゴールについて共通理解をし、教師が具体的な指導イメージをつかみながら、指導に取り組むことができた。

また、児童が相手を意識した活動ができるように、ペア学習やゲーム、全体発表などで伝える重要なポイント（アイコンタクト・ジェスチャー・スマイル）を示した指導が展開できた。



学年部会では、日々の授業においても学年共通の教材研究と指導方法等、細かな部分に至るまで協力して実践研究に取り組むことができた。また、公開授業に向けて、授業研究に取り組み、教師自身がお互いを高め合うことができたことに非常に意味があると感じている。



初めて踏み込んだ低・中学年での学習指導や5・6年生での「読む活動」「書く活動」が、来年度にむけた有意義な実践につながっていると感じる。



【授業の改善】

昨年度より先行して取り組む英語教育の実践に、本校全教員が一丸となって取り組み始めた研究は、新しい学習指導へのチャレンジという成果につながった。特にチーム部の成果として、英語活動のカリキュラムづくりや教育機器を効果的に活用した教材づくり、視覚的な学習環境を整備、アンケートの実施による児童把握などについて研究を深めることができた。



そして、学年部をベースに協力して創りあげた授業を公開することで、英語活動の学習指導に関する課題や改善点を探り、よりよい学習指導にむけて意欲を高めることができている。

【仮説の検証】

全学年で英語活動の授業を通して、児童の相互理解をポイントにした授業を仕組み、ただ言葉だけで伝えるのではなく、「アイコンタクトやスマイル、ジェスチャー」を伴ってコミュニケーションに重点を置いた指導について確認・継続することができた。



多くの児童がALTの話す内容やデジタル教材の基本的な内容の英語を聞くことに慣れてきていることが感じられる。また、中学年以上の活動では、ペア学習や全体発表などで伝える相手を意識させた。その結果、自分の伝えたいことを学んだ言葉や表現を使って、自分なりに楽しみながら伝えようとする姿がたくさん見られてきた。



(2) 課題

【評価】

評価の観点は、外国語活動の3観点とほぼ同じの「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」「英語への慣れ親しみ」「言語・文化に関する気付き」とした。「英語を聞かせて、英語の(単語・文)表現に慣れさせて、英語を話したり聞いたり読んだり書いたりして経験させる」ことを重点的に指導したために、評価は、授業時に児童の学習活動の様子を「行動観察」することを中心に取り組んだ。

しかし、児童の活動を正當に評価するのは大変困難だった。児童の活動自体が活発であり、支援を必要とする児童や指示を守らずに活動する児童への指導が重なったりすると、十分に組み合わない実態があった。

【コミュニケーション】

一部の児童が感じる英語活動への苦手意識を解消することができなかった。伝え合うパターンを提示しても、しっかりと相手を意識した発表や話し方がまだまだ十分ではなかった。そのために、担任だけの指導において学習形態のより細かな工夫をすることや、英語活動特有のALTとのTTスタイルを積極的に取り入れることにより、指導・支援の幅を広げる手立てが必要だと感じた。

【小中連携】

模索的な研究スタイルから進めてきたため、全職員に具体的な小中連携のビジョンやモデル校としての共通理解を図ることが十分できなかった。中学校1年生の授業参観や協力校への研究資料の送付などの情報発信や関係校の先生方を招いての授業を公開するなどの一定の成果はあるが、モデル校としての情報交換や共有すべき指導事項の共通理解を深めることは今後の課題となる。

(3) 次年度に向けて

児童が「授業が楽しい」「勉強したい」と思うためには、「英語ができたからうれしい」という手応えを感じる大切である。先行して取り組む英語教育の実践研究は、全職員のチャレンジという成果につながっているが、小中連携や他校との協力においては、さらに具体的に組み込んでいく必要がある。

今後も、児童の表現力の育成やお互いを理解するために伝えあう力を高めるために、教師自身の言語力の向上や授業力の改善を図り、魅力ある授業を創り出す研究につなげていきたい。